

生命保険における「助け合い」と相互性に関する考察

兵庫県立大学

田中 隆

本報告の目的は、生命保険の制度としての継続性について、「助け合い」や「相互扶助」と、技術的相互性の観点から、「純粹贈与」と、「技術性」や「システム」といった視点を加味して、考察を試みることである。

生命保険に関する、その相互扶助性等への正否に関する議論は、時代と共に希薄化していった感があるが、その一方で、生命保険は制度として存続してきた。この種の議論の希薄化が、時代遅れというイメージによるものならば、生命保険が制度として継続してきた本質的な構図や根拠への理解が、不透明な形で置かれていることになる。

この不透明性に対して、分析を試みることは、保険学において本質的に求められることである。そして、一見、実務から遊離し、時代遅れかと思われるこの試みは、生命保険や生保経営の足下に関する理解を明瞭化し、より確固たる基本軸を提供し得る、と思われる。

本報告は、以上のような背景と問題意識から取り組まれ、生命保険が制度として継続してきた本質的な構図について、「助け合い」と技術的相互性の観点と共に、「純粹贈与」、「技術性」、「システム」といった視点を加えながら、分析と考察を試みる。

本報告では、まず、近年までの消費者の生命保険への加入動機の傾向と共に、生命保険の「助け合い」や相互扶助の妥当性に関する議論を紹介する一方で、生命保険における相互性が存在している議論について、紹介を行う。次に、理念性・相互扶助性の強いフラタernal 保険組合の衰退と、相互扶助性が希薄化した相互会社の強固な継続性について議論を行い、記号化した「助け合い」の下で、錯覚的に理念的な相互扶助が維持されたことを指摘する。そして、記号化的な「助け合い」が、加入者の純粹贈与としての生保加入と、技術的相互性による結果としての相互扶助によって成立し、生命保険の実質的な相互性は技術性・システムの追求で達成されると共に、近年の消費者の自己利益的な生保加入傾向の一方で、InsurTech 的な技術性の伸張がさらなる相互性を確固としていく可能性を指摘する。

【令和元年度 日本保険学会全国大会】

第 I セッション（経済、経営、商学系）

報告要旨：田中 隆

制度として継続してきた生命保険について、理念的要素に加えて、存続してきた本質的な構図や根拠への整理・理解に取り組むことは、生命保険制度への理解の土台を再整備し、生命保険経営における基盤的前提を明確に整備し得る。さらに、本研究の分析作業は、近年の InsurTech 的な方向から、P2P 保険の可能性が拡大し得る状況の出現に関しても、その状況に対する本質的な理解を提供し得る、と思われる。

本報告では、制度としての継続してきた生命保険における本質的な構図について、「助け合い」や、技術的相互性の観点を軸にし、「純粹贈与」と、「技術性」や「システム」の視点からの分析を加えながら、分析と考察を試みる。